

## 木魚書『驪珠記』から見た“金蘭”習俗の變化

稻 葉 明 子

香港の雑誌『九十年代』一九九四年七月號に、“結拜金蘭眞野味”——木魚書中自梳女同性戀景觀”という文が掲載された。筆者周楚奇氏はまず廣東地方の女子の結婚拒否形態である「自梳」と「不落家」を概観し、『屈翁山年譜』『乾隆番禺縣誌』といった資料を擧げてその歴史の古さを述べたあと、それらと同時並行して流行した廣東省の説唱文學木魚書をそうした女子が好んで歌っていたこと、また版本の中に女同士の感情を扱うものがみられることを指摘して『解携籃』セット（後述）を擧げる。

しかし、清朝から民國となれば時期も長く、木魚書の流行状況も時代によって變化する。『解携籃』セットもまた、實は『驪珠記』という長編物語の改編である。「自梳女」「不落家」については人類學方面の研究もあり、やはり事情は單純では

木魚書『驪珠記』から見た“金蘭”習俗の變化（稻葉）

ない。本論ではこの長編物語『驪珠記』の『解携籃』セットへの改編を中心に更に詳しくみていきたい。

### 一 『解携籃』セットの内容

『解携籃』セットは、『木魚書目錄』<sup>(2)</sup>二九七頁、D. 15やHA. 109にみられるように、『解携籃』上下・『玉嬋附荐金蘭』上下・『玉嬋問現』上下・『玉嬋嘆五更』を不分卷二冊に改編した五桂堂刊本がよくみうけられる。版本の問題については後述するとして、その内容を擧げる。

#### ・『解携籃』上下

“金蘭”<sup>(3)</sup>を結拜して特別に仲の良い袁青嬋と金玉嬋。青嬋はしばらく會えなかったからと籃に澤山の贈り物を盛り侍女に持っていさせる。上巻はそれぞれの果物・藥草・花な

どの名にちなんで楽しい思いが託される技巧的な歌からなる。ところが侍女が金玉嬋の屋敷についてみると、玉嬋には新しい親友宋月容がいた。(以上巻上) 主人への背信であると怒った侍女の贈り物のお披露目はそれぞれの果物・薬草・花に怒りと切なさを含めた歌となる。急ぎもどった侍女が主人に事の次第を伝えようと、袁青嬋の悲しみはひとしお。

・『玉嬋附荐金蘭』上下

金玉嬋が早逝した袁青嬋を思い、廟に参って袁青嬋の仙界入りを願う。やはり薬草・果物・緞子などに辛い思いを託した敘述。

・『玉嬋問現』上下

金玉嬋が袁青嬋の墓を姉の葉氏とともに尋ね、袁青嬋の霊と話す。二人の間の誤解は侍女の早とちりによるものと確認する。

・『玉嬋嘆五更』

金玉嬋が鳥・果物・薬草・魚の名などを用いた嘆五更調で袁青嬋を思う。

このように、どの部分も薬草や果物などを用いた技巧的な敘述から成る特殊な作品であり、物づくしを楽しむための讀み物の可能性もあるが、袁青嬋は金蘭友である金玉嬋の背信が

もとで氣が塞いで死んだことになっているなど、『解携籃』冒頭から始まりある種のストーリー性を持たせてあるともとれる。女同士の“金蘭”結拜であり、女同士の浮氣あり嫉妬あり、その心の葛藤のみが主題となっている。周氏も言うように「同性愛」の物語とも讀めなくはない。

しかし、『解携籃』で決裂したはずの袁青嬋・金玉嬋が、次の『玉嬋附荐金蘭』では當然のごとく慕い會う關係になっており、かつその始まりは「早逝した袁青嬋」といかにも唐突である。また、『解携籃』では心移りの相手として宋月容という固有名詞が擧がるも、他の部分に關與せず不自然である。更に、『玉嬋嘆五更』の最後の一句は、

試体佢在地府如何(あの人が地府でどうするか見てみよう)と何がしかの別の物語を既に豫想させている。

## 二 長編故事『驪珠記』提要

前述の『解携籃』セットは『木魚書目録』にも複数あるように比較的容易にみられるものであるが、この奇妙な女同士の物語には、残存数は少ないものの、もともになる長編が存在する。『木魚書目録』VV022-34、『三寶驪珠記前集/後集』がそれである。今回『木魚書目録』には採録できなかった廣

州中山文獻館所藏本の複印を入手したので、それを用いる。卷首正題は『新本袁青嬋金玉嬋宋月容相知還陽配合田生天臺三寶驪珠記全本』と大變長く、且つ卷によって題名が若干違ってくる。そこで、本論ではこの物語を『驪珠記』と呼ぶ。

少々長くなるが、『驪珠記』の梗概を、『解携籃』セットと對比しながら、みていこう。

浙江省金華府に、今や天涯孤獨となった田彭澤という書生がおり、袁崇義の援助をうけていた。田彭澤の父は生前龍悟猶という瘋僧を大事にし、寺を寄進していた。袁崇義の妻を金氏、その兄は金教といい、袁家と懇意である。

袁崇義・金教にはそれぞれ一男袁宏謀・金王湖がいる。金王湖は十九才で妻は葉氏、葉氏の妹玉嬋は金玉嬋と名乗る。袁にも娘の袁青嬋がおり、金の屋敷に住んでいる。金玉嬋・袁青嬋は“金蘭”を結拜していて、ともに十六才。

袁崇義は江西南昌府へ、金教も建昌へ地府として赴任することになり、一同は三所に離ればなれになる。金華に残った田彭澤は嵐と火災で屋敷を失い、袁崇義を頼って南昌へ向かう途中、賊によって下僕として賣られる。

金教は建昌に入ると、縣主の宋翁と協力して政治を行っていた。宋の娘月容は十六才で、金玉嬋と仲良しになった。

木魚書『驪珠記』から見た“金蘭”習俗の變化（稻葉）

金華の變事に金玉嬋の母はショックで病氣になり、それを見舞いに來た袁青嬋の侍女が、金玉嬋と宋月容が仲良くしているのを見て、もどって主人に報告する。袁青嬋は贈り物を持たせて再度侍女を送るが、侍女はまたも宋月容を見て籃の中味に託して金玉嬋を罵る。（解携籃）袁青嬋は悲嘆のうちに死んでしまう。

このように、金玉嬋・袁青嬋の親族關係と、暫く會えなかった理由、金玉嬋が宋月容と仲良くなる背景が自然な形で納得できる。

金玉嬋は袁青嬋急死の知らせをうけ、すぐに宋月容とともに南昌に出かける。弔問のあと先に建昌に戻る宋月容の船を賊が襲い、宋月容はこののち賊から逃れて尼寺を轉々とすることになる。また、袁崇義・金教は折りからの金の侵攻に對し、前線で戦う。

田彭澤は災難から逃れるうち神仙のはからいで宋月容に出會い、宋月容無事の知らせを金玉嬋らに知らせた後、魂魄の抜ける病となる。そして、仙人となった龍瘋僧に天臺洞に連れていかれて法術を學ぶ。

江西に残った金玉嬋は、一人不安な日々を過ごしていた。亡くなった袁青嬋が仙界入りできるように、と「附荐金蘭」

の儀式を行う。すると、難にあってゐる宋月容のもとに袁青嬋の靈が現れる。

戦況ますます激しいものの、將軍凌天豹の活躍で宋軍は連勝する。都では奸臣蔡京らが連日宴を開いて、全國の美女を集めることになり、尼寺に身をよせていた宋月容が狙われる。

緊迫する戦況と宋月容の受難を織りまぜながら、速いテンポで物語が語られる。その合間に、江西に残った金玉嬋が袁青嬋を想い嘆き（玉嬋嘆五更）、巫のところへ行つて袁青嬋の靈に會う（玉嬋問覓）。この後、物語は法術を學んだ田彭澤と甦った袁青嬋によって、荒唐無稽なものになっていく。

金軍は鐵木眞道人をかつぎだして法術戦となる。龍仙人は太乙眞人の援助を求め、袁青嬋を死體を借りて甦らせ、宋月容を連れ戻した上、金玉嬋の病氣の母を救う。

荊州では、多くの民が金軍を懼れて荊州城に入城していた。地上の合戦は行われなかったが、上空では田彭澤と鐵道人が法術を用いて戦っていた。龍仙人の他、甦った袁青嬋、そして金玉嬋・宋月容も各々法力のある寶を用いて應戦、宋軍は勝利をおさめる。

太乙眞人は田彭澤と三佳人を結婚させるよう告げて去り、

宋軍は凱旋した。田彭澤は病氣と稱して皇帝には會わず、郷里に戻つて三佳人との婚禮を挙げた。

後に田彭澤・袁青嬋・金玉嬋は太乙眞人のもとで修行を積み、宋月容は九男二女をもうけた。

読み終えてみると、荒唐無稽な物語とはいえ、最終的には田彭澤と金玉嬋・袁青嬋・宋月容の才子佳人物語であつたことに氣づく。しかし、團圓の形態は「才子佳人」とはいえ、「才子」と「佳人」を結びつけていく方向性をもつ物語展開とはいふに難い。以下に、分析していこう。

### 三 『驪珠記』 本來の特徴

まず、提要を作りながら當惑したのは、いくつかの事件が、違ふ場所・場面で少しずつ展開していき、それを交互に入れ替わり立ち替わり述べていく點である。それは、才子田彭澤の流浪①、宋月容の受難の旅②、金軍との戦争③、袁青嬋と金玉嬋の想ひ④に分けられる。

①才子田彭澤の流浪——才子田彭澤は、まず袁を訪ねていつて賊によって賣られ、神仙の助けで宋月容に會ひ、江西にもどるとすぐ龍仙人のもと天臺洞で修行することになる。

②宋月容の受難の旅——宋月容は賊の手に落ちてから尼寺

に行き、皇帝の美女狩りの難を逃れて逃げまどうところを、皆のもとへ連れ戻される。

③金軍との戦争——随時緊迫した戦況が挟まれ、かつ金玉嬋・袁青嬋の父たちが参加している。最後に田彭澤らの参戦で勝利する。

④袁青嬋と金玉嬋の想い——想い、というのも妙な言い方だが、金玉嬋は江西にいて動かず、ただただ袁青嬋を思う、という場面が随所に出てくる。これが後に『解携籃』セツトに改編される部分でもある。

これら①④を見ていて気づくことがある。①②は人物の移動を伴うもの、③は戦争の展開を示すものと、いずれも敘事的な内容で、どんなストーリーが展開していく躍動感を伴っている。それに對し、④は死んだ袁青嬋を思い嘆くもので、果物や藥草の名などを用いた技巧的な敘述がひたすら続く敘情的な場面であることは前に述べたとおりである。④がでてきても話は前に進まないのである。

④はどのような場面かといえ、前集卷二の「解携籃」、前集卷三で袁青嬋の初七日をまつるもの、後集卷二の「附荐金蘭」、後集卷三「玉嬋嘆五更」、後集卷四「玉嬋問魂」である。

いずれも「金蘭友」袁青嬋を金玉嬋が思うもので、かなりの

木魚書『驢珠記』から見た「金蘭」習俗の變化（稻葉）

紙面を敘情的な感慨や祭祀文で占めている。特に後集卷三「玉嬋嘆五更」、後集卷四「玉嬋問魂」は、この場面が挿入されても物語の展開には何の影響も與えない。もしも、これらの④が構成上何か意義があるとすれば、金玉嬋の想いが通じて後に袁青嬋が甦るように見えるということくらいであろうか。しかし、袁青嬋は死んだときから「後に仙人に列せられるもの」と神仙の間で特別に扱われていたのだから、それとても話の展開には關係ないはずである。強いて④の存在意義を考えるならば、おそらくは友を思う純粹な敘情的な場面ということになるう。

形としては才子の存在する物語とはいえ、相次ぐ事件の中で立ち止まり、じっくりと噛みしめる心と心の結びつきは袁青嬋と金玉嬋のものである。才子田彭澤の入り込む餘地はない。そして、『解携籃』セツトへの改編に至って、才子は完全に消滅してしまった。

女同士の関係が中心となり才子の影の薄い木魚書の物語を、以前他にも紹介した<sup>6)</sup>。そこで、當地には時代が下がると女子の同性愛が現實に存在するものの、長編物語が出来た時期にはこの習俗自體がそのような段階にはなく、女子の間の強い結拜關係のみが古くから存在することを示した。

『解携籃』セットのもと長編小説『驪珠記』にも、存在感は薄いものの彼女らの共通の夫となる才子が存在した。

#### 四 『解携籃』セットへの改編

改編により、才子は消滅する。改編は習俗としての“金蘭”を意識して行われたのだろうか？以下、『解携籃』セットと、『驪珠記』内の該当部分を對比してその異同を検討してみる。

##### 1、より普遍的に

袁青嬋の侍女を『驪珠記』では「鶯兒」といい、『解携籃』セットでは丫環と呼んで固有名詞を避ける。<sup>7)</sup>

『驪珠記』の「解携籃」冒頭「敬啓粧臺妹玉嬋」は、『解携籃』セットでは「如玉嬋」と相手に「妹」の字を使うのを避け、『驪珠記』「愚姐抱愁深似海」は「愚妹愁深似海」と「妹」を一般的な謙遜の自稱として用いている。また、初めの「薬づくし」でも『驪珠記』では袁青嬋は金玉嬋をしきりに「表妹」と呼び自分を「愚姐」と呼ぶが、『解携籃』セットではこの部分は純粹な「薬づくし」としてかなりの部分が入れ替わっている。これらより、『驪珠記』では親族関係の呼稱が使われ、『解携籃』セットではより一般的な関係に讀めるよう改められていることがわかる。

また、『驪珠記』前集卷二12a五行目「近前叩請表嫂嬌娘」でも『解携籃』セット上巻3a三行目では「近前稟上秀才娘」と一般的な表現になる。<sup>8)</sup>設定の違いとしては、『驪珠記』前集卷二12a「半裁(半年)」が『解携籃』セット巻上3a二行目では「兩月(二カ月)」と改められている。『驪珠記』では建昌と南昌の赴任地の違いが背景としてあるので半年會わないというのも理解できるが、『解携籃』セットにはそのような背景はない。親しい友人の別離としては二カ月というのはより現実的な設定であろう。

##### 2、宋月容問題への對應

非常に興味深いのは、『解携籃』のシーンで袁青嬋の侍女に宋月容を見つけられたときの金玉嬋の對應である。『驪珠記』では、後に仲良く田彭澤に嫁ぐためか、金玉嬋の對應は「後できちんと話して三人仲良く誓い合おう」と、ある意味で穩當である：

玉嬋在閣聞環至　玉嬋侍女が來たと知り  
叫句月容親友听我言章聞いて月容私の親友  
只爲青嬋差婢到　青嬋侍女を送ってきた  
伶俐丫環說話在行　賢い侍女は辯もたつ  
恐怕你聞疑惑我共尔私恩愛　あなたと私がばれるかも

暫時回避思量

ちょっと隠れて誤解を避けて

待我善言將佢解勸

私がうまく説明するから

他日大家盟誓百年長

後日揃って長く誓おう

月容听得連稱贊

月容聞いてすぐさま稱贊

我姐□真心唔怕佢乖張あなたは（ほんとに彼女が大事）

事到其間無可奈

ここまで来ては仕方がない

只着潛身上綉床

身を隠して寢床の陰へ

それに對し『解携籃』セットでは金玉嬋は侍女に對し敵對的

で、目の前の宋月容に都合の良いことを言う：

玉嬋在閨閣聞環至

玉嬋侍女が來たと知り

叫句月容嬌姐听我言章聞いて月容私の親友

只爲青嬋差妹到

青嬋侍女を送ってきた

伶俐丫環說話在行

賢い侍女は辯も立つ

恐怕深閨識破我共尔私恩愛 あなたと私がばれるかも

暫時閃避来往他方

ちょっと隠れてどこかへ行って

待我粗言將佢洗□

私がうまく（言いくるめるから）

共尔山盟海誓百年長

あなたと誓うは百年の

月容就把嬌埋怨

月容すぐさま恨み言

姐尔貪新忘舊要參詳

こういうことはきちんとしなきゃ

事到其間無可往

ここまで来ては仕方がない

只着將身上綉房

身を隠して部屋へと戻ろ

長編のなかでは構成上のちに協力していかなければならない

三人であるが、『解携籃』セットではそうした背景からは自由

である。そうであるとすれば、『解携籃』で金玉嬋は本當に心

變わりしており、後に『玉嬋附荐金蘭』において袁青嬋の靈

と再會して舊怨を水に流す方が、「袁青嬋と金玉嬋の物語」と

しては構成が劇的なものになる。

改編によって、獨立した讀み物として體裁が整えられたの

みならず、女子の關係を強調する趣向もとりいれられたとい

うことができる。<sup>(9)</sup>

## 五 “金蘭”の變化

こうした改編の背景にある“金蘭”習俗の變化を見てみよ

う。小野<sup>(10)</sup>に、清、道光の舉人、錢塘の梁紹壬の著録が紹

介されている。

### 金蘭會

廣州順德村落。女子多以拜盟結姊妹。名金蘭會。女出嫁後。

歸甯。恒不返夫家。至有未成夫婦禮。必俟同盟姊妹嫁畢。然

後各返夫家。若促之過甚。則衆姊妹相約自盡。此等弊習。雖

賢有司弗能禁也。〔兩般秋雨盦隨筆〕卷四<sup>(11)</sup>

結盟を結ぶ女子たちの關係が、「金蘭會」と呼ばれており、同盟の姉妹達が嫁ぎ終わって初めて夫の家に入る、と紹介している。ということは姉妹達が嫁ぎ終われば婚家に入っているであり、完全な結婚拒否や同性愛ではない。

李鐵橋廉使漢令順德時。素知此風。凡女子不返夫家者。以硃塗父兄目。鳴金號衆。親押女歸以辱之。有自盡者。悉置不理。風稍戛矣。(『同上』)

李鐵橋が順德の令の時に思いついた策を講じ、すっかり靜かになったとする。『咸豐順德縣志』李鐵橋の傳には、その効果の程がみられる。

李湮字鐵橋、浙之山陰人。(中略)舊習阻止未嫁與鄰姊妹處、謂之金蘭。(中略)婦女知徒死無益、三十餘年來不復有自棄其生者、皆湮力也。

彼が任についたのは嘉慶十八(1813)年、『咸豐順德縣志』刊行は咸豐二(1852)年であるから、ほぼ、「今に至るまで三十餘年」としてよい。この間、「金蘭會」に對する締め付けは厳しく、集團自殺のようなことは起こらなかったことになる。

ところが、一八四六年には順德に「金蘭」を結拜する廟ができています。

蘇埠有宋帝三娘廟、淫祀也。俗傳十三日爲神誕、婦女之往

祈禱者、華妝炫服照耀波間。少者於此結金蘭、老者亦於此相心抱。(割り注)據採訪冊修<sup>12</sup>

三娘廟在蘇埠開基坊。道光丙午創建。<sup>13</sup>

「相心抱」とは、『稱謂錄』「方言稱子之妻心抱」に「小知錄、廣州謂新婦曰心抱。」とあり、嫁選びのことである。結婚拒否集團の巢窟と見なすまでには至らない記事だが、何らかの形で「金蘭」が存続してきたことが豫想される。更に、可兒1979他も示す張心泰『粵遊小識』<sup>14</sup>を見ると：

廣俗謂之自梳妹、實爲物色、尙未有屬也。(中略)近十餘年風氣又復一變。則竟以姊妹花爲連理枝矣。且二女同居必有一女儼若壘礎者。然此風起自順德村落、後傳染至番禺沙荳一帶。效之更甚則省會中亦不能免。又謂之拜相知。凡婦女訂交後情好綢繆逾於琴瑟、竟可終身不嫁。風氣壞極矣。

「近十餘年」風紀はまたもや一變し、姊妹たちは連理の枝、すなわち夫婦のような關係になってしまい、とうとう終生嫁がずに過ごすようになった。ここに至って『九十年代』周氏の言う完全な結婚拒否、同性愛と揶揄される金蘭會の特徴を有するようになる。

『粵遊小識』からみた「近十餘年」が正確には何年頃なのかは斷定できないが、「此の風は順德村落自り起こり」とある。



同治十一（1872）年に順徳に陳啓源の機械式製絲工場ができ  
てから、光緒年間には順徳を中心に珠江三角州一帯が世界一  
の生絲生産地となる。結婚を拒否する金蘭會を對象とした研  
究でよく指摘される「女子の經濟的自立が最も進み、實質的  
に家族から獨立して生涯を過ごせるようになった」時期と、張  
心泰の言う「近十餘年」は、場所・時期ともにほぼ一致する。

以上をまとめると、嘉慶末年に李鐵橋が赴任したころには、  
金蘭姉妹が嫁ぐまで婚家に入ろうとせず集團自殺を起こす習  
俗があり、李鐵橋が厳しく取り締まったため道光年間には集  
團自殺などはみられなくなった。ところが「金蘭」結拜の習  
俗は何らかの形で残り、光緒年間には更に變化して、完全  
に異性との結婚を拒否するものとして「金蘭會」が再び盛ん  
になったということになる。

## 六 『解携籃』セットに至る版本の問題

こうした「金蘭會」の變化と並行して、『驪珠記』から『解  
携籃』セットへの改編が行われている。上記を踏まえ、書肆  
による改編の時期と對照してみたい。『解携籃』セットには數  
種の出版形態が確認されている。

木魚書『驪珠記』から見た「金蘭」習俗の變化（稻葉）

a、五桂堂刊本（『解携籃』セット）

第一冊『解携籃』上下、第二冊『玉嬋附荐金蘭』上下『玉  
嬋問現』上下『玉嬋嘆五更』から成り、『解携籃』上首並び  
に『玉嬋問現』首に「以文堂版」の字のみられるもの。『木  
魚書目録』P. 008-P. 010' G. 167' D. 15' HA. 109' O. 103'

X. 132)

b、以文堂刊本

譚正璧『木魚歌潮州歌絃錄』<sup>⑨</sup>に『解携籃』『玉嬋嘆五更』  
が著録されるも、この絃錄所載のものは現在見ることはで  
きない。しかし、aの巻首に「以文堂」の削り残しがみら  
れることから、この版本が五桂堂に流れたことは確實であ  
る。『同』ML. 030' ML. 111)

c、丹桂堂刊本

ロシア外文圖書館（Отдел Редких книг в

Государственной Всероссийской библиотеке

иностранной литературы）藏丹桂堂刊本は封面題を『金  
蘭寄書解携籃』といい、巻上「解携籃」上下、巻下は「玉  
嬋附荐金蘭」「玉嬋問現」から成る。Государственная  
библиотека（Москва）にはその『玉嬋附荐金蘭』部分が  
ある。『同』RM011' RGM007)

## 中國文學研究 第二十四期

最も多く見られるaの『解携籃』セットから遡っていこう。aをみると、「以文堂板」や「□□堂板」といった削り残しのみられる四話が寄せ集められ、特にO.103では第一冊に『玉嬋附荐金蘭』の上、第二冊に下と、中途半端な部分で分けて二冊にしている。版木が以文堂から流れてきたのは間違いないが、もともとセットとして作られたものではなく、四話が獨立して刊行されていた可能性が高い。そして、それを裏付けるように、b以文堂刊本は『解携籃』『玉蟬嘆五更』が獨立して著録されている。

五桂堂・以文堂・醉經堂は光緒年間にできた書肆である。<sup>(17)</sup>また、木魚書の版木の流傳の様子から、丹桂堂はそれらの一世代前に榮えた書肆であることがわかつている。特に丹桂堂から五桂堂への版木の流入は多く、丹桂堂から以文堂、以文堂から五桂堂という流れ方もある。<sup>(18)</sup>

cの丹桂堂刊本とaに残る『解携籃』セットが同じものであるかどうかは一つの焦點であるが、『解携籃』も『玉嬋附荐金蘭』も版木の組み方から、特に「解携籃」では字體に至るまで酷似するものの、よくみると異なる版木であることを確認した。(圖版参照)ただし、その語句・内容はほぼ同じである。したがって、aの五桂堂セットは以文堂の刻したもの、た

だしその内容はすでにある丹桂堂刊本のもの、ということになる。

丹桂堂の活躍時期を考えると、稻葉1995「年代表」に道光二九(1849)年並びに咸豐元(1851)年にすでにその版本が見られる。その直前に李鐵橋の治世があるので、このような内容の版本がそれ以前に改編されることは考えにくい。従って、おそらくは改編は丹桂堂によってなされたと考えられる。奇しくも李鐵橋治世の後、順徳に淫祠ができたところである。彈壓のもとで影をひそめていた「金蘭會」であったが、そのようななかで女同士の思いはより強まり、ついに『驪珠記』の才子田彭澤をとりはらった「金玉嬋と袁青嬋の物語」を刊行させるに至った。

木魚書に用いられる版木は大變丈夫で、そのためにいくつかの書肆で長期にわたって流用されるが、以文堂ではそれを刻し直した。その流行ぶりが想像される。現在多く見られる五桂堂の『解携籃』セットがそれであり、以文堂・五桂堂の活躍した光緒年間、張心泰のいう「金蘭」姉妹達が「連理の枝」となった時期である。

注

- (1) 『九十年代』一九九四年。『解携籃』シリーズの他、『女嘆五更』『十二時辰』を紹介し、自梳女の中に流行したものとして『客途秋恨』『碧容探監』を挙げる。この記事はもと中山大學留學生高木一祥氏の御指教により知った。
- (2) 本論に用いる木魚書版本ナンバーは、著者ら編著『木魚書目錄』(好文出版一九九五年)に基づく。
- (3) 『金蘭』については稲葉1996に述べた。
- (4) 『木魚書目錄』では臺灣中央研究院歷史語言研究所傅斯年圖書館所藏分について大塚秀高氏の調査データを用いた。のちB. Rittin(李福清)氏によりその一部の詳細な紹介が爲されている。それによると『驪珠記』版本は五桂堂刊であるが、巻首に「佛山」と残ることから恐らくは注(5)の文光樓藏板が流れたものである。李福清1995、百三頁。
- (5) 封面「佛鎮福祿里文光樓藏板」、後集卷六尾「佛山街名福祿里進文堂內修行梓」から、初刻は佛山の進文堂とわかる。複印入手には、元中山大學留學生中野耕一氏、生田美恵子氏の協力を得た。
- (6) 稲葉1996。
- (7) 上から『驪珠記』『解携籃』セットの順に：
  - 卷二11a二行目「鶯兒」／卷上1b二行目「丫環」
  - 卷二11b一行目「鶯兒」／卷上2b六行目「小婢」
  - 卷二12a五行目「鶯兒」／卷上3a二行目「小環」
  - 卷二12b三行目「鶯兒」／卷上3b五行目「小婢」他。
- (8) 但し、『驪珠記』卷二12a七行目「葉氏」は『解携籃』卷上四行目でも「葉氏」として出てくる。
- (9) このほか『驪珠記』と『解携籃』セットで語句の異同がある部分には、長編の物語背景の削除と、服装描寫が挙げられる。『解携籃』セットで挿入された「生袖細口掛烏邊 黑紗兼共烏袖褲杏黃褲帶付粧前」は、判讀できない文字もあり、服装に関する用語も解讀しにくいのが、民國時代に結婚を拒否して姑婆屋で生活する娘達の服装に酷似する。
- (10) 道光十七(1836)年序。句點は『筆記小說大觀』第一輯による。
- (11) 『咸豐順德縣志』卷二十一列傳一文傳。
- (12) 『民國龍山鄉志』卷三輿地略風俗。
- (13) 『民國龍山鄉志』卷五建置略廟。
- (14) 張心泰『粵游小識七卷』卷七雜志。『小方齋輿地叢鈔』に採られた『粵游小志一卷』には該當部分は無く、原文は廣州中山文獻館藏の光緒二十六(1900)年『粵游小識七卷』に據った。この書は『版書偶記』に『粵游小志八卷』光緒十(1884)年刊とみられることから、何回か再版されたものらしく、『粵游小志』卷七本文の書かれた年代は不明である。書名も『粵游小識』とするものは私が見たものの中では廣州中山文獻館藏の版だけである。
- (15) a, b, cの他に譚正壁鈔錄に醉經堂刊『新刻玉嬋問現』(ML083)があるが、bと同じく確認不能。また天理大學圖書館所藏『解携籃』四葉(T. 126)は後に五桂堂によって刻されたか以文堂版本を用いて「五桂堂機器板」と埋め木したことが考えられる。
- (16) 書目文獻出版社一九八二年。
- (17) 梁培熾1978。但し五桂堂については嘉慶の版本も残り、議論

木魚書『驪珠記』から見た「金蘭」習俗の變化(稲葉)

## 中國文學研究 第二十四期

を呼んでいる。稻葉1995注五、李福清1995、笠井1996参照。しかし光緒年間のものとは版本の特徴が異なることから、版本がどちらの時期に属するかは判断しやしい。

(18) 稻葉1995「版本の流れ圖」参照。

## 参考文献

小野和子 1978 舊中國における『女工哀史』

『東方學報』五十（京都）

可兒弘明 1979 『近代中國の苦力と「猪花」』

岩波書店二〇六～二二三頁。

梁培熾 1978 『香港大學所藏木魚書鈔錄與研究』（研究篇）

香港大學亞洲研究中心

李福清 1995 中央研究院傅斯年圖書館藏罕見廣東木魚書書錄

『中國文哲研究通訊』第五卷第三期

笠井直美 1996 大英圖書館所見通俗文學書抄

——木魚書を中心に——

『中國古典小説研究會』第二號

稻葉明子 1995 木魚書版本流傳について

『木魚書目録』好文出版

——1996 木魚書『沈香太子』について

——女同士の結拜“金蘭”を中心に

『中國古典小説研究會』第二號

※本研究は、一九九七年度早稲田大學特定課題研究助成費による研究成果の一部である。

(2) ロシア外文圖書館善本部門藏丹桂堂刊 (RM011)

王城附府金蘭記  
懷慶友 不思歿  
美姝長久舊盟山  
奴有滿胸愁有結  
時已含恨相偷彈  
双陆圍棋心意懶  
自得新詩付玉蘭  
警放慈心舒白眼  
珠淚兩行垂衫  
望收禮哈親自  
御你忙道及心煩

古云消命是紅顏  
人願不從今古嫌  
荒離間解免愁煩  
粧柏針綉供巫渢  
覆芭蕉錦少吹簫  
明五萬箇中元日  
明早落雨兩個了翠  
快飲西來把魂驚  
明早落雨兩個了翠  
快飲西來把魂驚  
對可細菓蓬花頭  
兼贈領命官哀求

母桂雲挾詞兒  
一心只望長交枕  
可惜缺憾早辭九  
自係吳前此調劇  
夜未展寢日定殮  
人情近日多疎闊  
最忌拍度姐妯娌  
妹你情和燈燭帶  
對可細菓蓬花頭  
兼贈領命官哀求

圖版(「玉嬋附荐金蘭」冒頭部分)

玉姊附寄金剛上卷

吓受友不思怨山  
吮煉長義盟誓結  
奴有滿朋愁有結  
時比合恨情偷憐  
昨時國棋心意願  
百係新鏢明五顏  
暫放愁心舒眼  
疑醉布及四轉形  
狐理又紅毛彩衫  
最淨元氣更五鼓  
玉人付道於環

古云荷花紅顏  
人願不從今点賺  
憑誰問解免愁煩  
粧鉗針綉俱少吹彈  
明明雙雙併併元旦  
影影雙雙併併元旦  
朝朝兩箇了了環  
期期巧手同心魂  
主婢小大談秋月夜  
明消暗日出東山  
下著羅鞋力出脚

一心只望長交獲  
可憐嬌早拜  
自係前嫌餽肉  
夜來度腹口忘食  
人情近日多難  
歸去披虔曲曲閑  
妹你知和共舞吊  
紫鵲橋邊遙家  
二般勤排客王  
套好麻動排客王  
裙襯住物

(3) 廣州市中山文獻館藏文光樓藏板『驪珠記』

上峯佛指方餘尺  
附存蔡金蒲

詞中不表金龜敗  
目客父囊身難進  
惻爰爰一不脫粒  
人顧不從今折歡  
自係亂興別有因  
近局圍棋之更懶  
今朝乃係中元節  
採果來和拙用

續唱王神心安閑  
田生柴欄一首迄  
未見有音近  
吉消金是狂顏  
姪姐偷學戲兒  
狂兄腸斷偷偷猜  
甚喜歸營免吹彈  
待我捉賊破劫班

恐眉及眉前偷換  
青蛾花我心神顛  
一袖已望長安晚  
終有一滴痛癢言結  
良親莫我初心尚  
世情近日多殊尚  
暫放松簾舒倦眼  
盼得早來巷內去

懷念足見戊戌閏  
屋成爲看事多煩  
與終於公疊盡出  
誦彈開船遊心問  
縱然老蒼奇不見  
終年不忘念金蘭  
吟呼我憶南江好  
你當個代志頭

日先簽名哈布  
邀將哥哩唔喚  
火氣  
未扣印成  
日批作

字輝  
嬌娘  
頗有  
和詩  
月夜  
心煩  
賤心  
頗益  
象主  
如意  
落後  
月近